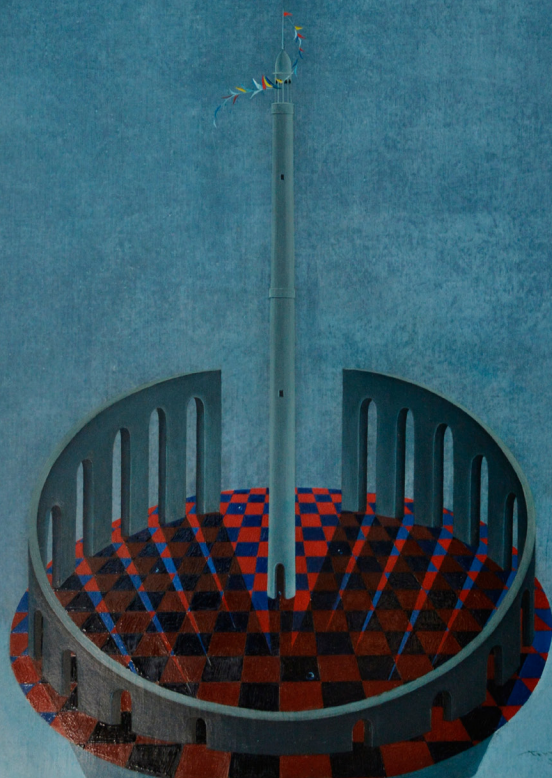


墨土 RUI

瀬戸正昭
岡和田晃
佐藤武
立原透耶
岩田英哉
荒巻義雄

Vol. 5

2020
JULY



壘 第五号

瀬戸正昭	詩	室蘭街道3—ウンベルト・サバの魂に	2
岡和田晃	詩	レオポルドシュタットの亡失	
		——表現主義なき時代の若き詩人に	6
佐藤 武	詩二篇	病室日記／獻畝	10
立原透耶	詩三篇	新月／春夏秋冬／甘美な食べ物の誘惑	18
岩田英哉	英国詩研究①	フィリップ・ラーキン『肌よ』	22
荒巻義雄	詩論	一九五〇年代英国詩とムーブメント派	
		フィリップ・ラーキン「スキン」を考察	30

室蘭街道3―ウンベルト・サバの魂に
瀬戸正昭

気温があがってきたので、桜のつぼみがふくらむ平成公園から
室蘭街道へ散歩にでかけた。まだ五分咲きなのに足下にはピンクの
花弁が累々としてゐる。イノチの姿はすこしの休みもなくつらなり
ながれてゐる……。はる。なつ。秋。冬。

月寒中央駅4番出口にはあんぱんの店。髪の黒い生女房が働いてゐる。
その向かひは朽ち果てた洋裁学院。六条院。人が住んでゐるかはさだかでない。
若菜信用金庫は店名が変わった。そのよこは居酒屋のチェイン店。花の宴。
その横は北海道銀行。向かひは葬儀場。花は咲いてもひとは散るのだ。

またしても居酒屋。人はさ・さ・なしでは生きられぬから。酒という不思議な
ものがあるので一体何人のひとが気が狂はずにすんでゐるのか。
向かひは交番でおまはりは不在だ。交番の横は公園。たれもない。
突然、救急車がオスプレイのやうに直角に宙を舞った。無音のサイレン。

あんぱん道路をこえた。蕎麦の店。胡蝶。ここの経営者は樺太の引き上げのひと。向かひは高齢者住宅 宿木。工事中。「とんでん」の横は留萌信金。和食の店の向かひはちつぽけな郵便局。小さな薬局。

カレーの店。壱番館。向かひはお菓子屋。またしても小さな銀行。

みな預けるお金もないのに金融機関が多いな。その横はもち屋さん。その隣は喫茶店。たれもない。壊れた看板。向かひは大きな集合住宅。

望月寒川を越えた。量販店。隣はからおけの店。向かひは百年前の会社がふたつ。桜の木。一里塚の碑。さうか。バビロンからここまで一里か。

探偵の会社。たれの秘密をさぐろうとしてゐるのかな。向かひはかつ井の専門店。隣はやはり葬儀場。今日は三人がたびだつたのだな。なにがあつてもひとはみまかる。さうにちがひない。おおしんとく丸の母が泣いてゐる…。中有の空に白い雲がうかぶ。

焼肉の店。隣は中華料理の店。元氣が出るニンニク炒飯。

向かひはエネオスのGS。大きな通りを越えた。

向かひは大きな郵便局。窓口でルイス・キャロルとウンベルト・サバが李太白の詩の平仄について大声で論争してゐる。ロバにひかれるサンチョ・パンサ。

そこのバス亭から月寒方面を望むとおおきなたるま太陽のしずむのが見えた。

この道のすごい湾曲。クルマの群れが無音で流れる。さて、20年後の街道筋に帰るとするか。あだしのではおれ自身の葬儀が神道でおこなはれてゐる。音なしの柏手のしの手。直会は客のいないホテルで。頭に包帯を巻いた看護婦さんが、注射器をいじりながら、見えない眼でおれを手招きして笑つてゐた。はよはよう。

君の千年を経んことも天つ乙女の羽衣よ 絶えずとうたありうとうとうととう。

注 最終連 謡曲「翁」から借用

レオポルドシュタットの亡失

——表現主義なき時代の若き詩人に

岡和田晃

斜めの切り込みが目立つ漆黒のキャビネットには、
ぐにやりと歪む面貌の夢遊病者が横たえられている
ほ ど こ し を

大きく振りかぶつて後退りまやかしの螺子を巻く、
雁字搦めになった透明な糸をひら瞞ひらいて断ち切る瞼の阡せん
ね と す れ ば

鈍角の切妻屋根に覆われた豪奢な寝台の飢えでは、
青褪めた碧鴈へきがんが白粉を塗られる彼女の舐ねふりを妨げて
い と し て も

劈つんぎき

預言された風景に溶け出した

束の魔

にわかには幻燈が爛らん叛はん射すれば

灰燼を踏み固めて息も絶え絶えにこじ開けた一突きで――
抜け出した彼女の御許へ届く前には是とすべきだろう――
膿みを超えていくサイドショーに躓きもんどり打って――
倒れる十二世紀のハスキンスはバチバチと手を叩くが――

いつまでつづけばよいのだろうか

もう Caligari だ、懲り懲りと丸眼鏡の博士ドクトルは間伏りまふせ――
寒村ホルステンヴァルの土壤調査の仕事を振り捨てて――
脱兎えめす、プラーグの大学街の裏通りに滲み出して詣まじるは――
ぎとら、牝めすを運んだ疫病えやみは悔んだ外套に心変わりし――

どこまでゆけばすくわれるのか

——偶像の守り髪にはためくペストの記憶がよたりよたり——
——手繰り寄せられ痛風公ルドルフ二世が桁桁と咲う聖火——
——眺む、幽玄の野菜が折り成した僧坊の外部でいまは

いつ

たい——

もう、しんでしまおうか

卵 愚、幾度目の再演が巡り……。

……そう、予定された屍を、律儀に継継と破戒していく、
無垢なる、ありふれて軀瓶、有名無実化した治道を
そう 際限なく ゆつくりと 辿り直して 垣間見えた

きみは神聖でもローマでも帝国でもない路を行け

※遠藤ヒツジ「透明な糸を」を下敷きにした箇所があります。

詩二篇 佐藤 武

「病室日記」

七十も過ぎ身の弱りに気が付けば 白い病室のベッ
ドの上で燻っている

窓辺の白いカーテンの外は 向かい側の病室の窓が
ずらりと並んでいる

冬のどんよりとした 鈍い光が窓越しに射し込む
ポタポタと時を刻む点滴

何も出来ない時間は実に長い

先の見えない暗く長いトンネルのようだ

乾燥しきつた空調の空気は気管を砂漠のようにする
ふっと口元に 森から微風にのり清々しい空気が漂

う

大きく空気を吸い込み生唾をぐくりと飲むと 生暖
かいドロリとした己の唾液であった

都会は暗く冷たい

病室も白く明るいが この白さが不安と孤独を導く
外も病院内もコロナウイルスでピリピリしている
人間の吐く息がウイルスと 混じり合い重く漂って
いる

孤独なウイルスは孤独な人間に音もなく ひたひた
と纏わりつく

森の中にはウイルスはいない
森閑とした森が嫌いなのだ

きつと都会のごみごみとした孤独が好きなのか・

田舎には蒼い宙

白い雲

なだらかな丘

雪をのせた稜線

雪原が広がっている

春になれば野鳥の囀りが 私の眠りを妨げるほどで
ある

新緑の森からは微風にのり真新しい酸素が私

の肺を潤おしてくれる

この病室は天井も壁もベッドも真白である

何も生み出すことが出来ない人間が白いキャンバス
の上で寝ているようなものだ

天空を仰げば真白なキャンバスが張ってある
さてさて 何を描けばよいのか・・・

点滴の刻む音の中で

・・・・・・・・・・・・・・・・

歔歔

暗闇の奥深くから微かに

聴こえてくる歔歔すすりなき

人の歔歔か

動物の歔歔か

魔物の歔歔か

魍魎すだまの歔歔か

歔歔は森の奥深くから

こだまのように反響してくる

それは悲しみに溢れた夜想曲

雲が月を覆う

静謐な闇の世界

雲に隠れた蒼白月が
狭間からときおりなげかける燐光
ときおり降る小粒の泪雨

これは己の歔歔だ！

遠き幼き頃

闇夜に聴いた歔歔

あれは私の歔歔

闇夜に燐る私の歔歔

私は一度死んでいる

幼いころに

深い森の大きな木の下で

母の手から離れ

父の手から離れ

それはやはり雲に隠れた蒼白月が

隙間から時おり放す燐光のときだった

静謐な森の薄闇のなかで
夜の蟲たちに囲まれ
蟲たちの夜想曲の中で
死んでいった
幼いころに

いま私は七十二歳

え――

私はだれ

詩三篇 立原透耶

「新月」

月の歩く音が聞こえた
ほーやれほー
月の瞬く音が聞こえた
ほーやれほー
月の微笑む音が聞こえた
ふーい。ふいのふう
月のはにかむ音が聞こえた
もう朝だよー

「春夏秋冬」

春の香を忘れたので
木工用ボンドで代用した

夏の湿度を忘れたので
腐ったオレンジを絞った

秋の気配を忘れたので
鈴虫の羽を筆った

冬の凍てつく寒さを忘れたので
金槌で頭を殴ってみた

「甘美な食べ物誘惑」

ジャックには豆を

アリスには砕けた卵を

蟹には杵臼を

爺さんには新鮮な婆さん汁を

レクター博士には脳味噌を

日本国民には和牛券を

◆英国詩研究①

フィリップ・ラーキン『肌よ』

岩田英哉

【原文】

SKIN

PHILIP LARKIN

Obedient daily dress,

You cannot always keep

That unfakable young surface.

You must learn your lines—

Anger, amusement, sleep ;

Those few forbidding signs

Of the continuous coarse
Sand-laden wind, time ;
You must thicken, work loose
Into an old bag
Carrying a soiled name.
Parch then ; be roughened ; sag ;

And pardon me, that I
Could find, when you were new,
No brash festivity
To wear you at, such as
Clothes are entitled to
Till the fashion changes.

【訳文】

「肌よ」

フィリップ・ラーキン

岩田英哉 訳

肌よ、お前は素直な普段着だ、

そんなお前なのに、その騙しやうのない若い張りを
常に保つことができるとは限らないのだ。

お前は自分の皺に倣^{なら}はねばならないから――

怒り、愉快、睡眠の皺の線に学ばねばならないから、
これら数少ないとは云へ学んではいけない信号^{サイン}にも

絶えず粗い

砂を載せた風だ、時間といふ奴は、

お前は厚くなつてしまひ、働いてたるんで

土埃^{つちぼこり}で汚れた、肌といふ名前を運搬してゐる

目の下のたるんだ古い袋の中に入つてしまふ

それなら干からびろ、ゴワゴワになれ、たるみたわめ

そして、赦してもらひたいのは、私といふ奴は

お前が新品だつたに時には、

お前を身に纏ふと云ふやうな、例へば

流行といふものが変はるまでは

衣類が其の権利を主張するやうな、

手放しのお祭り気分には少しもなることができなかったといふことなのだ。

【解釈と鑑賞】

全てのイギリス人がさうだとは言はないが、何かブリテン島に住む白人種の持つ皮肉や逆説といふだけでは単純過ぎる巧知といふものを感じる。

お前のイギリス人観を一言で言ってみると言はれたら、煮ても焼いても食へない奴らだといふのが私の答へとなるだらう。今の日本人と比較すれば、今の日本人は宮澤賢治の『注文の多い料理店』の狩人二人みたいに店の注文をきいてゐるうちに煮ても焼いても最後には喜んで喰はれてしまふだらうといはれば、なるほど其の通りだとあなたは肯^{うな}づくでせうから、彼我の違ひは、同じ島国と云つても歴然たるものがあるのです。

この詩を日本人の詩人が最初から日本語で書いても少しも面白い詩にはならないのではないかと思ふ。

冒頭の一行と二行を読むと、話者が肌に話しかけてゐる詩であることが解ります。

この詩には、日本語訳からは伺い知れないかもしれませんが（ここが訳者の苦心の為所）、

なかなか複雑に掛け言葉や縁語があつて、凝つてゐて、それは次のやうなものです。イギリス人が読んだらこれらを一瞬に感じて詩の奥行きは広がり、私たちが辞書を引き引き頭で理解しようとするのとはまた別天地があるのです。まあ、其の反対もまた然りでせうが。

第一連：

- 1° dress — lines — skin — surface
- 2° learn lines — forbidding signs

第二連：

- 3° Sand-laden wind — a soiled name
- 4° An old bag — carrying a name
- 5° An old bag — sag
- 6° work loose — sag

4の文字をみると、私は、ドイツならば、馬車に店の刻印を押した荷袋を載せて行く姿を思ひます。馬も人も働いてゐる。その袋には何々商会などといふ社名が押印されてゐる old bag じゅあひ、 carrying a name じゅあ。

その袋にある名前も歳月の中で soled name になり、そのやうにする方の風もまた sand (砂) 含みで、砂が積載 (sand-laden) されて運ばれてゐる。これが3。

1 は dress (衣装) にも line (縫い目) ありまた綾目あり、お肌にも皺 (line) あり線刻 (line) あり。

縫い目 (line) を読むこと (learn) にも歳とることが必要で、中にはかうしちやいけな
いと解つてゐてもさうせざるを得ないサインもあらうといふものです。さうして、皺が
増えて行き、お肌は荒れて行く。衣装 (dress) にも生地 of 表面 (surface) あり、お肌
にも surface (張り) あり。最初の3行は skin と dress の主客が入り混るかの如き観が
あつて、しばし意味を取りかねて行きつ戻りつするといふ愉悅のひと時でした。私は優
れた詩の一行があれば、徒然なるままに、何に飽きることなく日暮しすることができる。

5 の sag は目の下のたるみで、これを袋と呼び、an old bag に掛けてある。これで、

6 の work loose が働いて loose (ゆるみ・たるみ) と sag のやはり目の下のたるみの同
義関係が判ります。

といふやうに手の混んだ仕立てのSKIN(肌)といふ名前の衣装を身に纏った巧みな詩で
ありました。

日本人が普通和歌などを読んで感じることにあるやうな手放しの感情や情緒といふものは
ありません。

◇詩論

一九五〇年代英国詩とムーブメント派

フィリップ・ラーキン「スキン」を考察

荒巻義雄

今回、ふと思いつき、岩田英哉さんという得がたい才能に翻訳を託したのが、副題の「スキン」である。

やがてメールで送られてきた邦訳を一読、こうした傾向の詩との対面は初めてだ、と気付いた。

改めて調べてみると、英国詩壇にはムーブメント派という傾向があり、そのわかり易さと軽妙さ、英国知識人らしいユーモア、あるいは日常性が、多くの人々に愛されていたとわかった。

しかし、五〇年代の英国詩壇に、突如、出現したラーキンを中心とするムーブメント派に対する風当たりは強かったらしい。詩を特別なものと考える一九四〇年代の新啓示派や新ロマン主義派の支持者からみれば、ムーブメント派の親しみやすさが低俗に思われたのであろう。

一方、わが国詩壇の五〇年代は、荒地派の時代である。因みに、国文社が出した『荒

地詩集1951』^{註①}の巻頭「Xへの献辞」を読むと、敗戦国日本から立ち直ろうとする意気込みが行間から伝わってくる。

評論は鮎川信夫「現代詩とは何か」、黒田三郎「詩人と権力」、加島祥造「破壊的要素」で、スペンダー、オーデン、カフカが論じられている。

筆者自身も、当時は学生時代であるが、『荒地詩集』の影響をもろに受けた一人だった。荒地派の原体験は、戦地を経験した詩人たちの第二次世界大戦の敗戦体験であり、あるいは原爆体験である。復員派や焼け跡派の精神が受けた深い外傷をばねにして、彼らは詩作に励んだ。

実は、時代こそ違え、近代詩を刷新したT・S・エリオットも同じである。ただし、エリオットの戦後は、人類史初の科学力と工業力による大量破壊が行われた第一次世界大戦の戦後である。

まして停戦後、スペイン風邪が全世界で猛威を振るい、三〇〇〇万人（一説では一億人）の人々が死んだと言われる。

エリオットの『荒地』第一章「死者の埋葬」^{註②}は、まさにそうした廃墟の心象を詩つたものだ。

戦勝国、敗戦国の区別なく、戦中戦後を生きのびた人々にのしかかった耐え難い現実からの逃避。これが、ロシア・フォルマリズムやダダ、シュルレアリスム、抽象芸術を産んだと言われる。

実は、SFでもあると筆者は言いたいし、現実逃避という言葉を負の意味でなく、人間自身が自己の精神を崩壊から守る安全装置なのだと考えている。

註③

現に、芸術が、戦う思想の武器であらねばならないという根拠は、どこにもないのだ。たまたま、居合わせた時代がそうだったからにすぎない。ミッシェル・フーコーの用語を使えば「エピステーメ」、すなわち各時代ごとに基盤となる知の枠組みが生まれるものなのである。

註④

第二次大戦戦勝国の英国でも、敗戦国日本でも、戦争の反省から社会主義が圧倒的の支持され、日本ではいわゆる進歩的文化人が活躍した。

英国では勝利の立役者チャーチル率いる保守党が労働党に敗れ、労働者の政府ができた。だが、日の沈まぬ大帝国と言われた英国は海外植民地を失ない、揺りかごから墓場まで^{（ヘゲモニー）}を標榜した労働党が、ソ連に倣って推進した基幹産業の国有化政策が、やがて失速、覇権をアメリカ合衆国に譲った。

わが国でもある。労働者の蜂起はじめ、保革が激しく対立したのが、戦後の風景であった。

そう考えると、ムーブメント派に対する、むしろ個人攻撃さえ思わせる批判も、当時の空気を反映した一種の階級闘争のようにも思われてくる。

*

改めて、復員派でも焼跡派でもないが、小学六年で国家という偉大な存在に、初めて

不信任を抱いた筆者としては、戦前戦中の皇国思想の見事すぎる瓦解の目撃者となつて、新たに手に入れたマルクス・レーニン主義、これと戦後思想の両輪であつたサルトル実存主義に、自分の存在理由を求めたのは自然な流れだった。

だが、今改めて当時の記憶をたぐり寄せると、あの時代は、ジル・ドゥルーズの用語を使うならば、マルクス主義とサルトル実存主義によるマーキング、すなわち〈領土化〉が行われていたのだった。^{註⑤}

だが、一九八〇年代のソ連崩壊と共に、サルトルも思想界の第一線から姿を消し、構造主義やポストモダンの世界となつた。のみならず、直近では新実在論である。

根本原理であるはずの哲学思想も、着せ替え人形の衣装のように衣替えされるのである。

であるならば、もしかすると、シニカルではあるがペシミズムではなく、ある種のニヒリズムかもしれないが、妙に明るいムーブメント派の再評価が、これから起きるかもしれない、思い始めているのだ。

そもそも、ムーブメントとは運動の意味だ。派生して社会の動向や時代の流れや雰囲気の意味したりする。つまり、カチツとしたイデオロギーの対極にあるものだ。だから戦う芸術の戦士からすれば、彼らは日和見主義者に見えたのであろう。

しかし、詩は楽しむもの、つまり楽器である場合もある。人間は、四六時中、主義主張だけを考えているとは限らないし、人間が生きるということは、実は小さな悩みの連

続である。

右の道を行こうか左にしようか。ランチは何を食べようか。お腹が痛むが、どうしようとか。たしかに、国家天下を論ずるわけではないが、こうした些細な悩みを抱くことが、生きているということでもあると思う。

＊

それにしても奇抜だ。自分自身が自分の皮膚に向かって「お前は普段着だ」と語りかけているのだ。

筆者にはそんな経験は一度もない。この詩を読んだために、それこそ、揺りかごから墓場まで、一秒たりとも離れたことのない〈皮膚〉について、考えさせられてしまった。たとえば、〈皮膚〉という言葉がある。相手を遠回しに非難する場合に使う。では、何に對して遠回しかというと骨である。皮膚と肉は、骨から離れているからだそうだ。

一方、“骨の髄まで”とか“皮を切らせ肉を切り、肉を切らせて骨を断つ”という言葉いかたもある。ということは、皮膚は骨に對して軽んぜられているということである。

現に、皮相的と言え、上っ面のことで侮蔑語である。しかし、我々が、自分の肉体のなかで視認することのできるのは皮膚だけなのだ。

一方、女性たちが、日々、専念するのが“お肌の手入れ”である。スキンシップという和製英語もあるが、肌と肌との触れあい、もつとも深い愛情の交流である。

皮膚は、外界を感じるセンサーでもある。料理を味わい、匂いをかき分けるのも皮

膚である。もし皮膚が司る感覚がなければ、我々は実存さえしないのだ。

もしかすると、ラーキンという詩人は、形而上的な観念や思想からの攻撃に対する反撃を、この詩に託したのではないだろうか。すなわち、形而下的皮膚感覚による反撃、前出ドウルーズに従えば、〈脱領土化〉の試みである。

註⑥

まだ眼の開かない赤児が、初めて体験する外部世界は、ふくよかな母親の乳房ではないか。男女の営みも同じ皮膚感覚ではないか。

もつとも、原初的な感覚器官が皮膚である。骨（本質・思想）が、常に皮膚（現象・日常）の上位に立つとは、必ずしも言えないのだ。

註① 他に、北村太郎、三好豊一郎、田村隆一などが執筆。

註② 四月は残酷極まる月だ

死んだ土地からリラの花を生み出し

記憶と欲望をない交ぜにし

春の雨で、精なき草根を振るい立たせるのだ。

註③

エドガー・ライス・バローズの『火星の女王』は一九

一七年。ウェアード・テールズ誌の創刊は一九二三年、ア
メージング・ストーリーズ創刊一九二六年など。

註④ エピステーメーの原義は「憶測ではなく、学問的に得
られた知識」であるが、フォーコーは『知の考古学』の中で
「各時代の基礎的知の枠組み」の意味で使った。

註⑤ ドウルーズによれば、土地の領土化は刻印（マーキン
グ）によって生まれる。同様、文壇や詩壇でも、しばしば、
マーキング（領土化）が行われ、異分子は排除される。

註⑥ 〈領土化〉からの脱出行為が、〈脱領土化〉である。木
の枝が折られ棒になり道具になる。あるいは武器になるとす
れば、これも〈脱領土化〉である。

編集後記

寄稿者の近況

瀬戸正昭

「饗宴」の周辺

コロナ騒ぎで日本中がふりまわされるなか、詩誌「饗宴」も編集作業に遅れが生じておりますが、なんとか7月1日に87号を発行する予定です。この号は、恒例の海外詩の特集で、ロシア、ドイツ、メキシコ、アメリカの詩人の作品や英語俳句を掲載します。

また荒巻先生に跋を頂戴した笹乃千絵（俳号は衣女）さんの句集「いのち」は、6月半ばに刊行に

なります。これはでき次第、著者になりかわって新聞社や旭川市内書店に寄贈、搬入する予定です。

診療の合間に詠まれた真摯な五年間の作品群に、どうぞご期待ください。また「饗宴」海外詩にロシア詩の翻訳を寄稿していただいたロシア文学者岩浅武久さんのレスコフの訳書が2冊2月に群像社から刊行されました。近く札幌市内で、お二方合同の祝賀会を開こうとただいま企画中です。

（令和2年6月3日）

岡和田晃

新作の現代詩では、「早稲田学報」二〇二〇年六月号に「プロレタリア詩の誕生」、「白垂紀」157号に「世界の起源の泉」、「ナイランド・クォーター」Vol.21

に「アーレアの守護者による頌歌」が、それぞれ掲載されました。

（令和2年6月10日）

佐藤 武

五月二十五日肌寒い日が続く、ウイルスが私たちの生活、すべてをかえようとしている。

天空をおおげば蒼い空がどこまでも拡がっている。

横浜ギャラリー日吉個展延期、愛媛県今治市ギャラリーブレサム個展延期、日本美術家連盟「佐藤武アクリル画の秘宝」ワークシヨップ延期と悉くコロナウイルスに虐められています。

最近の陶器の制作に燃えています。筆をほんの少し休み、粘土と戯れるのも実にいいものです。

（令和2年5月25日）

立原透耶

遠隔授業のテレビ会議システム、周囲では大変好評のようで、疲れ切っているのは、わたしだけのようないな気がします。わたしって、もはや前世紀の遺物なのかもしれません……。

(令和2年5月25日)

岩田英哉

八王子の山上に籠り、日々書齋の聖なる空間にて思索に耽る日々です。思索・読書・執筆の繰り返し。周期の合間に食事と散歩。友人にさういはれたので、近時八王子のツアラトウストラを名乗つてをります。略してハトラ。一日のうち午後になるとハトラは山を厳かに降りて下界へと参り、山の下の交差点にあるセブン・イレブン

にてチョコレートの半分かかったクラシック・ドーナツを購入、これが美味しいのである。病みつきになつて毎日食すものなり。以前は何故こんなものが美味しいのかと不審であつたが、この頃はアメリカ人の気持ちが少し解るやうになりました。墮落せるツアラトウストラ。穴があつたら入りたい。

(令和2年6月4日)

荒巻義雄

一月以来の六ヶ月、街の中心部へは一度も足を運ばず籠城生活をつづけておりますが、作家という職業はもともと孤独な作業なので、むしろ充実した日々を送っております。

それにしても、新型コロナの流行が、人類が長い時間をかけて構

築した世界の経済システムを、根底で危ふくしている。この現状を、どうイメージしたらいいでしょうか。

たとえば、テレビの中でだれかが言っていたのですが、「この世のありとあらゆるものが、ペンキ塗られてになった世界に住んでいるようなものだ」と。

まさに、SFの世界です。

カフカ「変身」の主人公、ザムザ氏ではありませんが、ある朝、あなたが目覚めたら、部屋の中すべてのものに、触れたら死んでしまう毒ペンキが塗られていた。この状況で思考実験してみるとわかりますが、取っ手に指を掛けて窓を開けることも、ドア・ノブを掴んでドアを開け、脱出することもできない……。

実は、今号で、岩田さんにお願
いしてラーキンの詩「スキン」を
訳していただいたのも、これが理
由です。

我々は、視覚と聴覚を優先して
生活していると思っていたら、実
は「触れること」、つまり触覚にも
非常に多く依存して生活してい
たのです。

新型コロナの脅威は、まだまだ
つづきます。用心に用心を重ねて
暮らしましょう。

（令和2年6月12日）

RUI
2020 | 7 | 15

発行 壘の会 表紙 佐藤 武 編集協力 (有)ネオセントラル
<http://aramakisf.jpn.org/rui> E-mail : rui@aramakisf.jpn.org
本書の無断複写・複製は著作権の都合上の例外を除き禁じられています。